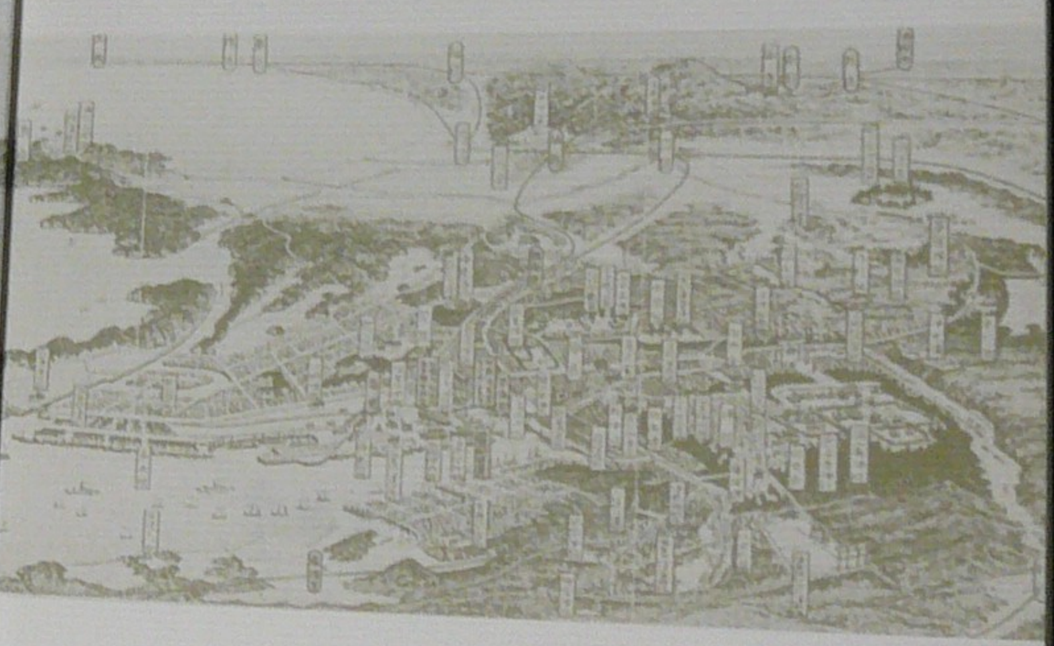
歌宗文物四今一最四十世紀
歌宗文物四今一最四十世紀

第3章



松島湾鳥瞰図

白　翠

東北大学ヨット部50年史

発刊にあたって

東北大学ヨット部五十周年記念号の発刊にあたり、白翠会会員各位が、各界の指導的立場に立つ有為の人材として、それぞれ社会の発展に多大の貢献をされていることに深い敬意を表し、あわせて母校ヨット部に対する日頃の絶大な物心両面のご協力に対し、心より感謝を申し上げます。

東北大学ヨット部は、東北の地に初めてヨットを浮かべて以来、全国レベルレースでの数々の入賞を果たし、昭和三十三年にはインカレ本大会において総合優勝に輝き、全国大学の頂点に立つという歴史をもつ部であります。また、これまで東北水域のヨット活動を育成し支える、大きな原動力となってまいりました。東北大学学友会体育部には、現在三十八の部が名を連ねておりますが、このような輝かしい歴史と伝統のある部は数少ないと思います。

さて、現在の東北大学学友会体育部の活動状況をみてみますと、残念乍ら全般的に不本意な状況にあるといえます。ヨット部の場合、個人戦ではいくつかの優れた成績を挙げ活躍しながらも、団体戦では惜しくも敗れ、層の厚さに欠けるという点に問題があるように思えます。一方で、東北大学に入学してくる学生の実態は、高校時代に運動部で活躍したことのある学生が極めてまれであるという事実であります。大学入試までの偏差値による序列化が進む状況では、大学入学後に初めて文武両道の実を発揮する機会に恵まれるという、まことに憂慮すべき現実があります。

本誌記載の「五十年史」によれば、現在はまさしく市民スポーツ化の時代であります。しかし、少なくとも東北大学の学生については、社会一般のスポーツレベルが向上しているのに反して、相対的にレベルが低下する状況を呈しております。このような状況を踏まえると、レース中心のいわばナンバーワンのみをひたすら目指すという運動部の在り方は、現実的には厳しいものがあるといえましょう。大衆化した、市民スポーツ化の時代における、東北大学ヨット部の在り方がいま問われているともいえます。

東北大学ヨット部長
樋口龍雄

ところで、自然の中でのスポーツという点で共通する運動部に山岳部があります。山岳部の目指すところは、未踏峰の峻険に挑み、他の人より一歩でも早く山頂に足跡を印すことにありました。これはまさにレース中心の考え方で、ピークハンティングと呼ばれました。しかし、一九五三年イギリス遠征隊による世界最高峰のエベレスト登頂成功を契機として、ピークハンティングに代表されるレース中心の時代は終りをつげました。その後、より困難なルートを目指す、ルートハンティングの時代を経て、最近ではよりクリーンで独創的で多様な登り方が好まれるようになりました。例えば、資金にものをいわせて、大がかりなキャラバンを組織し、装備や資材をふんだんに使うやり方は、一昔前のものになりました。それよりは、酸素ボンベを使わないで八千米級の山に挑戦するとか、環境にやさしい登り方を工夫するとか、個性や創意が求められています。これはただひたすらナンバーワンのみを目指す在り方とは発想の異なるオンリーワンへの指向といえます。

もちろんヨットレースとのアナロジーが成り立つとは思いませんが、活力ある創意工夫や個性を発揮するオンリーワンを土台として、その中からいつの日か真のナンバーワンが輩出することを願っております。

先輩各位の築き上げてきた伝統を堅持しながら、無限の可能性と将来性を内在する現役の学生諸君が逞しく大成するよう、適切なご指導を頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

会員各位の益々のご健勝とご発展を祈念してご挨拶と致します。

五十年史に寄せる

白翠会会長代行
島　田　平　八

振返ると昭和21年春から62年9月までの41年余の間、ヨット部にそれぞれの立場で密着していたことになります。

創設期は部員達の無からの自力での創設で、好きなこととは言え、良く活力があったものだとの感が深く、良い部を創ったことに後輩は感謝せねばならないでしょう。松島パークホテル前での創立祝賀帆走にはヨレに乗ったモーニング姿の本多総長のほゝえましい写真が残っています。間もなく戦争の影が色濃くなり、僅かに海軍の援助で余命を保って終戦を迎えるわけですが、その頃塩釜市長をされた桜井市長（始めは塩釜商工会長）や栗野豊助県会議員（後に宮城県ヨット連盟会長になる）岩本正樹病院長、明治屋仙台支店長中井直二氏らに非常に世話になったと聞いております。これまでは松島近辺を主な活動基地にしていました。部員には千賀屋、尾張屋独まん、ニコ屋等はなつかしい場所として記憶にあるらしく、よく話しに出てきました。

進駐軍に松島パークホテルが接収され、ヨットと共に活動の基地が無くなったとき、福島部長はじめ、多くの部員と先輩達の努力で旧帝大の中では東大、京大とほぼ同時に復活しました。それは昭和21年11月の琵琶湖での帝大戦が3大学のみであったことにもうかがえます。その後26年の全日本学生選手権、27年宮城国体を塩釜・松島で開催したことによってスナイプ艇が新しく増え、松島雄島前に県営の艇庫も建ち、ヨットの環境整備も急速に進み興隆に向かったことでした。これを契機に東北ヨット界の拡大発展の責務も東北大ヨット部に負わされることになりました。日本ヨット協会との連係、役員派遣、東北学院大はじめ他大学ヨット部の創立援助、仙台一高、ほかの高校ヨット部の援助、またこれに関連して、各種全国大会の地元開催の企画、運営など、現在の東北大ヨット部からは想像も出来ない程です。このときの福島部長は学校の授業以外はヨット界の世話に時間を使っていたように感じられました。今も先生の手書きのガリ版制の帆走指示書、役員任務指針、大会準備のフローシート、さらには手造りの東北ヨット協会旗などなどが思い浮かびます。

ヨットの置場所はパークホテル接収後県営艇庫の出来るまでは、松島五大堂と福浦島の間にあった西沢造船所の好意で置かせて貰い、マスト、セール、舵等の部品は自宅の土間に入れて貰いました。

その頃より松島の内海はカキ棚・のり棚の増加や遊覧船のために練習場所を花渕沖に移すことになり、それに伴って自前の艇庫が無い不便を感じるようになり、福島先生の骨折りで、インカレ優勝が圧力となって吉田浜に拠点を移すことになりました。

吉田浜時代になると東北学院大が実力を付けてインカレ出場も容易でなくなりました。それと共に何となく活力が減退に行ったようであります。一つには吉田浜沖の海面の複雑なうねりによると思われます。基本の練習には内海の方がよいのです。また高校ヨットの普及が東北大には不利になり、また高度成長期で卒業生の地元定着が少なく先輩との連帯感の希薄化もあったのではないでしょうか。部員数の減少も気になることの一つであります。ともあれ過度の上下関係による締め付けの少ない、部員同志で部の運営議論して考え、部長、監督、コーチ等は必要なときにアドバイスしたり、学校の事務局と接渉したりする好ましい雰囲気は伝統として伝わっているように思います。先輩と現役は時にはギクシャクしたこともあるが割合にうまく運営されていたのではないでしょうか。これも先輩連の海洋スポーツで培われた広い心のお蔭ではないでしょうか。日本ヨット協会に行くと「名門隊」と冷やかされるのが唯一の片身の狭い思いをすることであります。

50年の過去を振り返って、次なる世代への飛躍の礎を築くことを期待しています。

発刊に寄せて

東北大学学長
西澤潤一

貴族や貴族の生活を送って来た我々貧乏族にとっては、ヨットなどというのは貴族趣味の極致であって、全くの高嶺の花と思って来た。しかし、この頃の健康さが大切に時代に入って来ると、何とはなしに、生まれかたの悪かったあの不満を晴らすことにもなる。

それ程にヨットには高尚の美しさを感ずる。こんなことを書くと、「ヨットを知らない奴」と云われそうである。しかし、何十人もが乗り組んで優勝盃を争う国際レースがあることも勿論承知はしているが、それでも、エレガントな高尚を思わせることは不思議である。

ヨットが欧州発生であることを考えれば、当然かも知れないが、体力と技術と、そして叡智と勇気のすべてのバランスの下に行われる競技であり、その一つを欠くのは勿論、一寸不足するだけで敗退してしまうと云うことは正に近代スポーツの華たる資格充分ではないだろうか。

この理智的な美しさが、私などには耐られない美しさとして映るのだろうし、やれなかった鉄来不満が、貴族趣味のように見えさせることになるのだろう。

軍艦なと云われそうだが、南の与那国島、波照間島、西表島、黒島、新城島、竹富島、石垣島、宮古島、沖縄本島、徳之島、奄美大島、諏訪之瀬島、屋久島、鬼界島、福江島、五島、平戸島が私の廻った南海の島々である。未だ残っているいくつかの島々にも夢を見ている。

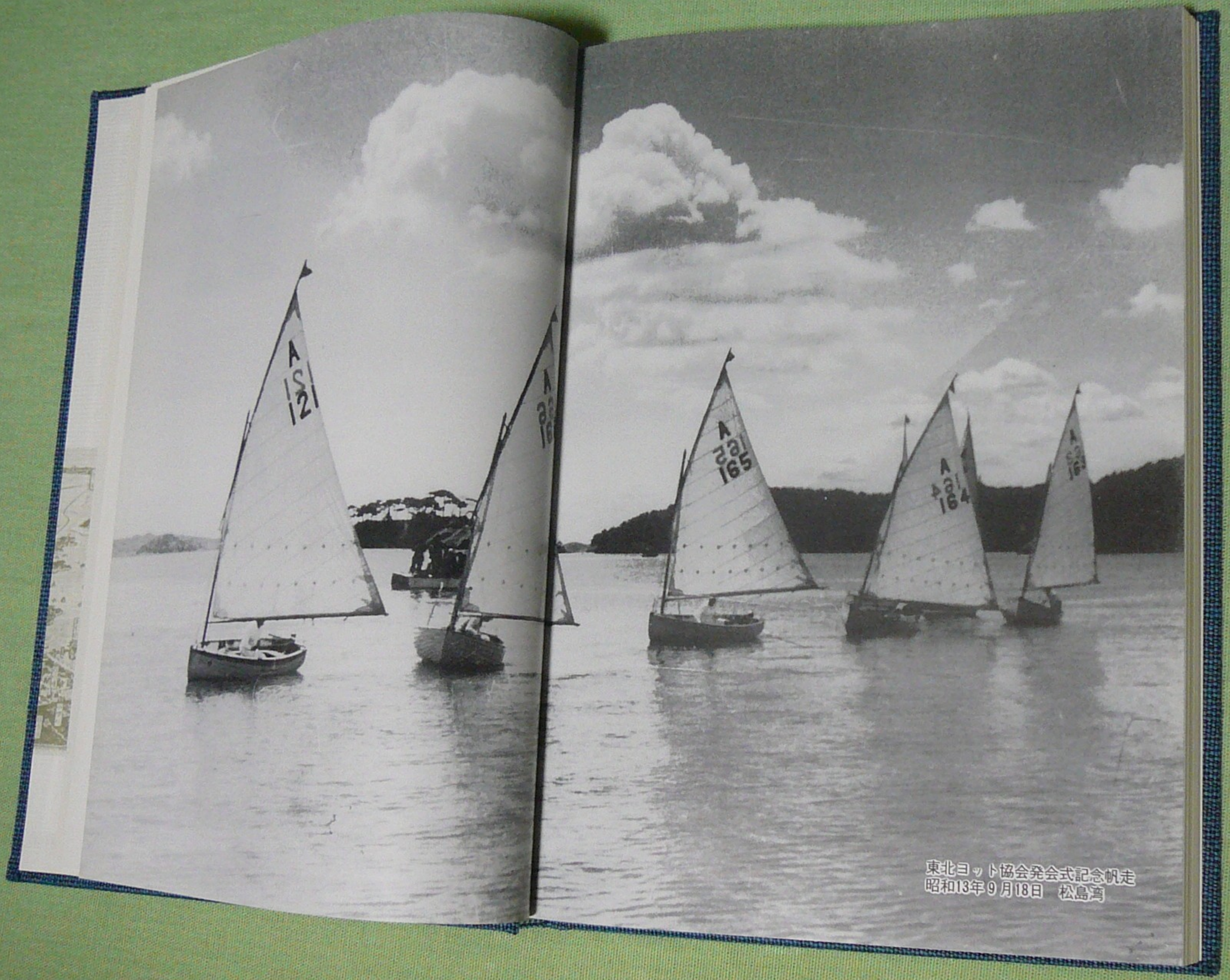
用にような伊豆・小笠原の島々の他に、私は松島湾を練習基地とした、東北から北海道にかけての太平洋岸こそ少々荒々しい外航ヨットの適地になるのではないかと思って岩手県の方々にお薦めしたことがある。

いくつかの港を整備すれば、充分に避難港はとれるし、陸路を利用することも可能だから、万が一の場合に予定に障害が出ることもないであろう。これで更に北方四島が返還になれば、屈強な世界的なレース場にもなるのではないか。

そうなれば、我が東北大学のヨット部も二十一世紀に入れば、正に世界的な強力ヨット部に成長するのではないだろうか。千島列島から、アリューシャンを経て、アラスカを辿れば、これは正に世界的ヨットコースではないか。

素人の浅はかと笑って戴いて……と書くのが普通だけれど、笑わないで実現していただけないだろうかと、図々しくお願いして、五十年史発刊のお祝いの言葉とさせていただきたい。

ポーランドの湖沼で、ディンギー級かの艇を操らされて、あわや横転という技を披露し、あとの水洗いのシンドさを教えられた。幸いにして実践の憂き目には遭わなかった。そのためか、気仙沼で食べた戻り鰹の美味さを思い出しながらこの一文を終らせていただく。我惟ら、呆れ果てた奴である。



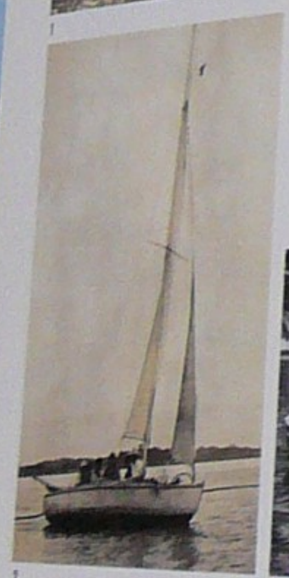
東北ヨット協会発会式記念帆走
昭和13年9月18日　松島湾

全日本学生ヨット選手権大会優勝
昭和33年7月29日　塩釜港外花淵

全日本学生ヨット選手権
昭和54年8月　富浦田沖

3

4



2

5

1.12吋A級ディンギー
2.10吋L級

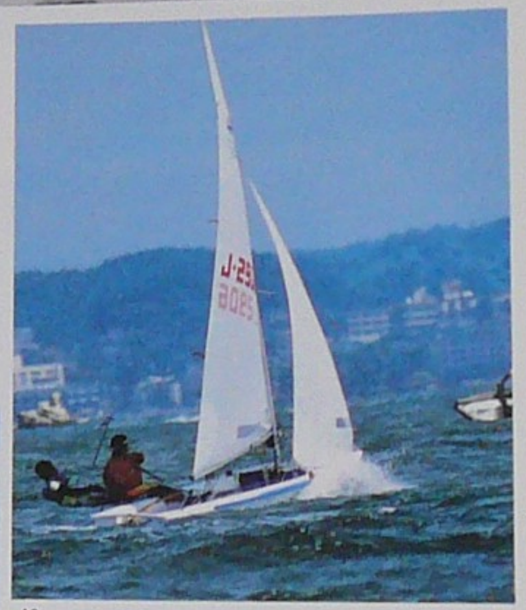
3.14吋オリンピックヨレ級
4.フィン級
5.教育艇初代「翠」

6

7

8

9



10

6.スナイプ級（ウッド艇）
7.スナイプ級（FRP艇）
8.初期470級

9.クルーザー「日高見」
10.470級

50周年記念式典

記念碑

目　次

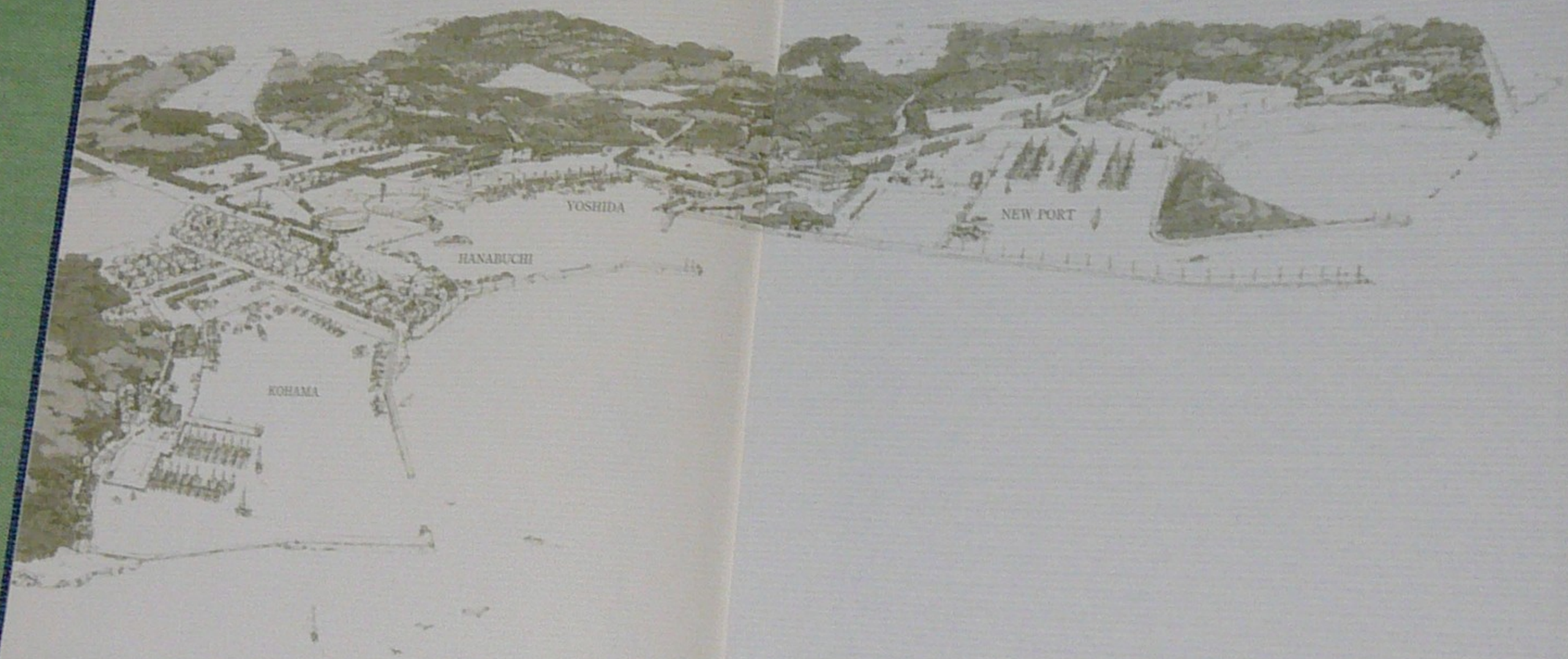
発刊にあたって	東北大学ヨット部長	樋口龍雄
五十年史に寄せる	白翠会会長代行	島田平八
発刊に寄せて	東北大学学長	西澤潤一

1．五十年史

黎明期（～昭和12年）…… 22
創成期（昭和13年～昭和16年）…… 23
動乱期（昭和17年～昭和19年）…… 27
復活期（昭和20年～昭和23年）…… 39
発展期（昭和24年～昭和35年）…… 46
充実期（昭和36年～昭和43年）…… 56
模索期（昭和44年～昭和47年）…… 70
スポーツ化の時代（昭和48年～昭和54年）…… 76
市民スポーツの時代（昭和55年～）…… 81
外史（クルージングの航跡）…… 86
五十年史キーワード…… 92

2．五十周年記念行事

記念式典…… 96
「東北ヨット発祥の地」記念碑建立…… 100



Neo-Shichigahama Marine Resort Area

東北大学ヨット部ゆかりの地

❶ 創立当時、厨房として利用した松島パークホテル

❷ 復活期、発展期の合宿所であった円通院（昭和24年撮影）

❸ 戦後、遠征、修理、合宿等お世話になった西沢遠征所。（現在は観光桟橋となっている。昭和25年撮影）

❹ 昭和27年、東北で最初に整備された松島ヨットハーバー（平成2年撮影）

❺ 寒島よりの出艇（昭和23年撮影）

❻ 戦後第1回目の合宿を行った桂島

❼ 昭和35年に建造された吉田浜艇庫

❽ 船の建造から修理までおせわになっている小野寺ボート（平成2年撮影）

❾ 戦後まもない頃利用した真山坂艇庫（昭和24年撮影）

❿ 昭和35年以降合宿の本拠地となっている吉田浜

⓫ 昭和54年インカレ本大会開催のベースとなった小浜ヨットハーバー（日高見国体選手時撮影、昭和55年）

⓬ 昭和53年以降東北インカレが開催されている鳴瀬川水レース場所（平成2年東北インカレ時撮影）